

熊本県 A 地区での特別支援教育における 中高連携の定着に向けた試み (1) — 初期段階の連携の在り方について —

河田 将一 ・ 猿渡 和博¹⁾

A trial of cooperation by special needs education among the junior high schools
and the high schools in the A area of Kumamoto prefecture (1)
— Regarding the first step of cooperation —

Shoichi Kawata & Kazuhiro Saruwatari

熊本県 A 地区においては、高等学校の定員割れが目立ち、特別な支援が必要な生徒が進学する実態がある中で、特別支援教育に関する中高連携がほとんど行われておらず、高等学校は中学校からの情報提供を望んでいた。そこで、A 地区の中学校及び高等学校による中高連携に関する協議を行った。協議では、文書による手段として、高等学校側から独自の「フェイスシート」を提案したが、個人情報保護や情報提供について保護者から理解を得ることの困難が予想されることから、1校も記入がなかった。そのため、高等学校担当者が中学校に出向き、口頭での情報収集を行い、その情報と高等学校での実態とを合わせた「プロフィールシート」を作成した。その結果、特別支援教育コーディネーターや担任だけでなく、教科担当者も生徒のこれまでの状況や特性を理解し、授業改善及び生活支援に繋がった。一方で、中学校からの円滑な情報提供が行われるための文書のあり方が課題となった。

キーワード：中高連携、初期段階、A-CAPDo サイクル

I 問題と目的

2007 (平成19) 年度より特別支援教育の完全実施となって以降、全国的に見れば、発達障がいのある子どもたちの支援においては、小・中学校における特別支援教育の支援体制は充実が図られ、特別支援教育コーディネーターが配置され、個別の指導計画、個別の教育支援計画が作成されての支援が充実しつつある。

しかしながら、高等学校における発達障がいのある生徒への特別支援教育の現状としては、支援体制として、特別支援教育コーディネーターの配置や教育相談の体制はあるものの、授業は一律の一斉授業に終始しがちで、欠課時数は進級の可否に反映され、生徒の問題行動ではその程度だけが尺度となって停学・退学になってしまう傾向があ

り、加えて、授業における特別な支援が少なく、別室で過ごす生徒への十分な支援が見られないなど、大半の学校で多くの課題を抱えている (杉田, 2009他)。

これらのことに鑑み、文部科学省は、2007 (平成19) 年度より、「高等学校における発達障がい支援モデル事業」を実施し、モデル校の研究成果を全国に発信することによって高等学校等における特別支援教育の更なる推進を図った (文部科学省, 2007; 2008a; 2009a)。

モデル校に見られる主な取組としては、①教職員への理解・啓発、②生徒の実態把握、③授業づくり、④保護者への理解、⑤就業支援、⑥専門機関・専門家との連携・指導助言、⑦ソーシャルスキル・トレーニング (SST) の実施、⑧発達支援クラス等の設置、⑨校内支援体制の整備、⑩校内委員会・校内支援会議の積極的運用、⑪先進校視

¹⁾ 熊本県立 B 高等学校

察, ⑫研修会への参加, ⑬成績等の評価方法の検討, ⑭基礎学力の向上, ⑮他の生徒への理解・啓発, ⑯専門機関・専門家との連携・指導助言, ⑰支援員・支援サポーターの活用が挙げられるが, これらがすべて網羅された展開ではなく, 各学校の実情に応じて焦点化された取組がなされている。

一方, 通常学校における特別支援教育においては, 幼稚園・保育所から小学校, 小学校から中学校, 中学校から高等学校への移行期に, 前段階の園・学校で作成された当該児の個別の指導計画, 個別の教育支援計画をはじめとする種々の情報が, 次の段階に適切に伝えられ生かすことができるよう, 個別の「相談支援ファイル」を作成し, 当該児の生涯に亘る支援がなされるよう取組んでいる自治体も出てきている(文部科学省, 2008b; 2009b; 2010)。しかしながら, この取組は障がいのある当該児に限定される傾向があり, 障がいの疑いがあったり, 特別な支援が必要であると思われる当該児は, 支援の対象になっていないケースが少なくない。

また, 澤田(2009)は, 福島県のある地区における中高連携の現状調査を実施し, 中学校・高等学校ともに連携の必要性は認識しており, 「指導の手がかりとなる生徒の実態」「社会性, コミュニケーションについての特性」「生活・行動面の特徴」に関する情報の共有を求めているものの, 実際には積極的な連携が図られておらず, 入学試験で不利益があると感じたり, 個人情報保護をハードルとして中学校側からの情報提供が難しいことを指摘している。

今回, 研究を対象とした熊本県 A 地区の高等学校の現状としては, 以下の3点が挙げられるが, これまでに特別な支援が必要と思われる生徒に関しての中学校との連携は行われておらず, 喫緊の課題となっていた。

- ①各学校が定員割れとなっていることで, 学科・クラス内で学力や目的意識に大きな差があり, 生徒たちへの一斉の授業展開が難しい。
- ②成績不振による留年・退学があるので, 入学時から学習面における実態把握をする必要がある。
- ③欠席・欠課による留年・退学があるので, 生活面・対人・健康などを含めて, 本人の特

性・家庭環境の実態把握を早期に行い, 支援方法の検討が必要である。

以上のことから, 本研究では, 熊本県 A 地区での特別支援教育における中高連携の定着に向けた取組について, 取組推進校での実践を中心に報告し, 初期段階での連携のあり方について探求する。

Ⅱ 方 法

1. 取組推進校の選定

B 高等学校は, 文部科学省「高等学校における発達障がい支援モデル事業」の指定を受け, その事業取組にも中高連携が不可欠となっていた。本研究の実施にあたって, 県立の実業系 B 高等学校(以下, B 高等学校)を取組推進のための高等学校として1校を選定した。

2. 実施期間

X - 1年12月 ~ X年12月

3. 取組の方法

(1) 高等学校同士の「横のつながり」の場の設定

B 高等学校の特別支援教育コーディネーターと協議の結果, A 地区全体の中高連携の実態を考慮し, B 高等学校以外の A 地区内の高等学校6校(分校を含む)にも参画を依頼し, 「A 地区高等学校特別支援教育研究会」(以下, 研究会)を独自に設置し, 中高連携をはじめとして, 各高等学校の特別支援教育の実践に関する相互の情報交換・研修を実施することとした。

(2) 中学校との「縦のつながり」の試み

研究会に A 地区内の中学校16校の担当者を招いて, 「中高連携の具体的手段・方法の検討会(以下, 検討会)」を行うこととした。加えて, 検討会の後に中学校担当者への自由記述式のアンケートを行うこととした。

(3) 連携の実施

実際に中高連携を実施することとした。その際, 連携の手段については, 検討会で出された意見を踏まえることとした。

Ⅲ 結 果

1. 第1回研究会の開催(X - 1年8月)

A 地区の高等学校のみで, 現在不登校及び保

ふりがな	姓 男 生年月日	〇年〇月〇日	年 〇年
氏名 ○○ ○○	姓 ○○町		
家族構成	父、母、姉	就学前 小学校 中学校 欠席△△日（1年△△、2年△△、3年△△）	
保護者所見	保護者所見		
わが子の特徴	誤解されやすい点	対応のコツ	
※将来の希望（保護者・本人）			
現在の本人の様子（学 校）			
	できているところ	気になるところ（配慮点）	取組と成果
学習・認知	○グループ学習では、周りに相談しながら製作に取り組み。	○四則計算に苦手意識がある様子。 ○板書事項をノートに写すことが遅く、困難な感じを受ける。	○席を最前列にすることにより、細かな指示を与えることで理解の手助けとなつていく。 ○黒板が見えにくいとのことだったが眼鏡をかけることで見やすくなり、板書事項を書き写せることが出来た。
生活・行動・対人	○授業中に終わらなかった分は放課後残って作業する。 ○クラス内の友人は多く、家に何人か集まって雑談。対人関係は作ることが出来る。	○通明けに休みが目立つ。（提出物が増えるため）	○放課後残って、提出物関係の宿題を済ませておくこと、休まずに登校する。
健康面		○体調を壊しやすく、休みがちである。 1年次 △△日 2年次 △△日 3年次 △△日 （合計 △△日）	○家庭訪問と電話連絡を繰り返すことと中学時代の欠席日数（△△日）と比べると減ってはいる。

※記述内容は架空のものである

図1 改訂前のフェイスシートの記入例

ふりがな	姓 男 生年月日	〇年〇月〇日	年 〇年
氏名 ○○ ○○	姓 ○○町		
家族構成	父、母、姉	就学前 生 育 歴 小学校 中学校 欠席△△日（1年△△、2年△△、3年△△）	※小学校や家庭から課題点とあがっていることがあれば記入する。
★保護者所見 ※保護者の認識と見解			
我が子の特徴	おとなしく見られるが、言い出したらきかず、頑固な面もある。誰に対しても優しく、朗らかに対応する。家の手伝いもよくする。		
誤解されやすい点	口数が少なく消極的に見える → 本当は元気で活動的 表現力が乏しいため、何も考えていないように見える → 友人とはよく話す		
対応のコツ	返事を急かさず、ゆっくり聞くらせようとする。 話にくそうなときは、紙に書かせて時間をかけてでも考えや思いを表現させる。		
将来の希望（保護者・本人）	職：〇〇（父の仕事が手伝えるように） 本人：よくわからない		
★現在の本人の様子（学 校）			
	学習・認知	生活・行動・対人	健康面
こゝに具体的な事柄がある様子	○四則計算に苦手意識がある様子。 ○板書事項をノートに写すことが遅く、困難な感じを受ける。	○通明けに休みが目立つ。（提出物が増えるため） ○放課後に残って、提出物を学校で終わらせるよう指導する。	○体調を壊しやすく、休みがちである。 1年次 △△日 2年次 △△日 3年次 △△日 （合計 △△日）
取り組んだこと	○席を最前列にすることにより、細かな指示を受ける。 ○黒板が見えにくいとのことだったので、視力の確認。	○放課後に残って、提出物を学校で終わらせるよう指導する。	○家庭訪問と電話連絡を繰り返す。
どういったこと	○細かな指示を与えることで理解の手助けとなった。 ○眼鏡をかけることで見やすくなり、板書事項を書き写しやすくなった。	○宿題や提出物が期限を越しても出せるようになり、休まずに登校する。	○中学時代の欠席日数（△△日）と比べると減ってはいる。
卒業後生活に向けて	○本人のできる・できないを確認して、指示や指導する必要がある。	○自分一人ではできないことも多いので周囲に同様の作業を行って教える者がいれば助かる。	○保護者との密な連携を大切にしたい。 ○自己管理ができるための手立てを検討すべきだろう。

※記述内容は架空のものである

図2 改訂後のフェイスシートの記入例

健室登校の生徒に関する支援についての情報交換を行った。すべての学校で、不登校または保健室登校の生徒がいる実態が浮き彫りとなった。また、別室での学習等への対応については、生徒の実態に合わせて課題を与える学校もあればそうでない学校もあり、学校間での温度差も見られた。加えて、単位認定に関しては、欠課時数等への配慮として、学年末で評価を行う学校も見られたが、概して特別な配慮はなされずに、原級留置や退学となってしまう実態も明らかとなり、特別支援教育の視点に立った特別な配慮を各学校で工夫していくことが求められた。

一方で、入学後に不登校等の状態を呈する生徒に関して、中学校でも同様の状況を呈している場合や、特別な支援が展開されていた場合の情報の必要性が指摘された。

2. 第2回研究会の開催（中高連携に関する講話：X-1年12月）

中学校の管理職（校長または教頭）及び特別支援教育担当者を招いて、筆者の一人（河田）が「よりよい特別支援教育における中高連携のため

に」のテーマで、連携の事例を交えての講話を実施した。講話では、以下の事項が指摘された。

①熊本県内の幼稚園・保育所と小学校、小学校と中学校、中学校と高等学校の移行連携の実態として、小中連携以外の連携は進んでおらず、とりわけ中高連携は芳しくない。

②上位学校への入学に関する連携の時期としては年度末に集中しており、多くの園・学校から入学する場合は、受け入れ先の上位学校の情報収集が煩雑化している。

③個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成しているケースの伝達は比較的容易であるが、それらが作成されていない特別な支援が必要な幼児児童生徒の情報を詳細に伝達している園・学校は極めて少ない。

④情報の伝達の形態として、「文書」と「口頭」があるが、「文書のみ」の場合は文章化された伝達内容に含まれる言外の意味を汲み取ることが難しく、具体的な支援内容が伝わらないこと、「口頭のみ」の場合は聞き手の情報処理の仕方に依存してしまい、最悪な場合メモも残

表1 第1回検討会後のフェイスシートに対する中学校側からの自由記述

※肯定的な記述

- ・生徒の生きる力を育成する視点から考えると、高校に情報を伝えるのは大切だと思う。
- ・今回の取り組みは中学校にとって大変ありがたいことだ。就職のことまで見据えて、送った生徒たち面倒を見てもらうのだから、できることは何でも協力していきたいと思う。
- ・情報の取り扱いが難しいことが多いと思うが、入試の情報ではつかめないことが多いので、中学校と高校が生徒のために歩み寄っていかねばと思う。
- ・難しい問題を難しく捉えているように感じる。必要な情報は何か、誰のためのフェイスシートなのか助言者の先生方のコメントの中にヒントがあるように思う。

※否定的な記述

- ①フェイスシートに関するもの
 - ・現時点でフェイスシートを作るのは難しいと感じた。
 - ・高校にフェイスシートを上げる時、誰の責任になるのか？(校内だけだと大丈夫だが)
 - ・フェイスシートに関して、保護者にまずは紹介を行い、理解してもらえばいいと思う。
 - ・フェイスシートに関しては、会議で指摘されたように、①情報の一人歩き・漏洩、②保護者との関係、この2点が心配される。助言のように、中学校に直接来て話を聞き取る方法が良いと思う。
- ②保護者の理解・同意に関するもの
 - ・中学校でも保護者との関係には苦慮しているので、この短期間に保護者の同意を得ることは非常に難しいと思う。合格者招集日などを利用して保護者の同意を得る方法を考えてほしい。
 - ・入学後に、気づきのある生徒に対して保護者、教師で中学校に相談していく形も考えられるのではないかな。
 - ・学校の職員は理解しているが、保護者からの理解を得るのは難しい。
- ③フェイスシート及び保護者の理解・同意に関するもの
 - ・個人情報の取扱いは慎重に行う必要がある。フェイスシートの作成に関しては、校長の指導のもと職員で協議したい。
 - ・保護者が子どもの“特性”を認め、教師と話しあうようになるまでには、多くの葛藤がある現状を考えると、フェイスシート作成に関して、さらに検討しなければならないと思う。例えば、どこでどのように保護者に伝えるのか。その情報をどう保管し、どう生かすのか、など内容がデリケートなだけに、きちんとした道筋を示さなければ、周囲の理解は難しいと思う。
- ④情報の取り扱いに関するもの
 - ・子どもたちのために中高連携は不可欠なものだ。しかしながら、情報の取り扱いも含めて、課題がいくつもある。
 - ・情報の取扱いは、担当職員だけでなく全職員の共通理解が必要になる。
 - ・知っておかないと生徒のマイナスになることは多い。文書にできなければ口頭にするしかないのでは。
- ⑤連携に関するもの
 - ・中学校に出向いての連携はどこでもされているので、次年度はそういうところも考慮されてはどうか。

らないこと、が挙げられ、双方のバランスが重要である。

この講話の後の自由討議の中で、高等学校担当者からは、中学校からの「文書と口頭の双方」の情報提供の必要性が訴えられたが、中学校管理職・担当者からは、「当該生徒の問題点を上位学校に伝えることへの保護者理解に対応できない」「すでに教員には膨大な書類の負担があり、さらなる書類の追加は教員を追いこんでしまう」「いわゆる気になる生徒に対しての個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成に抵抗がある」などの意見が多く出され、この時点では、連携の必要性の確認に止まり、連携のあり方については今後の協議に持ち越すこととなった。

3. 第3回研究会の開催(第1回検討会：X年2月)

筆者の一人(河田)が助言者、もう一人が検討会のコーディネーターとなり、A地区特別支援学校校長を助言者の一人として招聘し、1回目の検討会をB高等学校で開催した。前回講話後の自由討議を踏まえ、「文書」による連携の第一段

階として、X年度に入学する生徒に対しての「フェイスシート」を提案し、合格発表以降の「文書」による連携を依頼した(図1)。

しかしながら、連携の必要性は十分に理解できるものの、多くの中学校担当者が、①特に中学校時代に支援の対象生徒としていないケースでの保護者の同意・理解が得られにくい、②当該生徒の個人情報の記述内容と取扱いの問題があるなどの理由で、この時点でのフェイスシートを含めた「文書による連携」は否定された。

そこで、助言者2名から、①フェイスシートを作成できる中学校は高等学校に提供するようにすること、②フェイスシート作成の有無に関わらず、合格発表後に「中学校に出向いての口頭での聴取」を行うことを進言し、可能な範囲で実施するよう促した。

また、協議の終了後に、中学校担当者に自由記述式のアンケートを実施したが、その記述にも同様の内容が記されていた(表1)。

表2 第2回検討会後のフェイスシートに対する中学校側からの自由記述

※肯定的な記述

- ・生徒によってはフェイスシートが必要である。
- ・高校側がフェイスシートを作り、その様式をもとに口頭などで情報を収集するという方法も有効である。
- ・フェイスシートは必要だとは思いますが、保護者の理解が大切である。その為にも家族構成等の基礎情報は無くして理解を得やすくすべきである。
- ・各学校で生徒理解のための資料として作られているものがあれば、それをそのままフェイスシートして出したほうがよい。
- ・記録としてのフェイスシートはあっていいと思うが、口頭の聞き取りをもとにフェイスシートを作成するとよい。

※否定的な記述

- ①フェイスシートに関するもの
 - ・フェイスシートの作成は保護者の関係等、課題があり難しい。
 - ・フェイスシートより簡単な文書があったほうがよい。
 - ・フェイスシートは保護者が理解されて、承諾されて、開示に耐えるものではない。
 - ・3月末にフェイスシートを作成するのは時間的に不可能である。口頭の伝達のみで良いのではないか。
 - ・現状では中学校で作成したものを外部へ出すことはできない。
- ②保護者の理解・同意に関するもの
 - ・保護者の了解が必要なので、助言者の言われるように家庭環境の基礎情報等は省略できればと思う。
 - ・助言者の言われるように、保護者の同意のいらぬ簡略化したシートを考案し、中学校側から高校にあげるといシステムをとったほうがよい。
- ③文書の様式に関するもの
 - ・助言者の言われるように、最初はシンプルな形でやってみてはどうか。
 - ・できるだけ簡素化したほうが長く続くと思う。
 - ・基礎情報が別になっているシートのほうが書きやすい。
 - ・細かすぎて書く側が大変なので、簡素化が必要である。
- ④情報伝達の方法に関するもの
 - ・各学校（義務制）で様式が違っても、伝えられる内容があれば口頭でも良いのではないかと思う。
 - ・中高の伝達方法は口頭でいいと思う。子どもは日々成長し変化していくので、各学校で作成・更新していけばよい。

4. 高等学校担当者の中学校への訪問と口頭での情報収集（X年3月）

X年3月（合格発表後～入学直前）にA地区すべての高等学校の担当者または他の教員が中学校を訪問し情報を得ることにした。

情報収集の方法は、「口頭」による聴取及び意見交換とし、生徒の学習面・授業態度・対人関係等に関して質問して、高等学校担当者がその内容についてメモを取り、その内容を校内委員会等で報告し、高等学校の教師全員が共通理解を図るようにした。

その結果、B高等学校では、1年生13名の特別な支援を考慮する必要のある生徒について情報を得ることが可能となった。

5. 第4回研究会の開催（中高連携の具体的手段・方法の検討会：X年6月）

A地区特別支援学校校長、A地区教育事務所指導主事、大学教員（河田）を助言者として、2回目の検討会が行われた。まず、X年3月の情報収集について、①情報が必要な生徒については、すべての中学校で口頭での具体的な情報提供がなされ、積極的に情報提供をする中学校も見られたこと、②聴取した情報は、高等学校にとっては生徒を指導する上で生徒に不利な情報ではなく、そ

の情報を踏まえた入学当初から生徒の特性を考慮した言語指示や授業実践に反映されていること、③中学校から高等学校に1ケースもフェイスシートが渡らなかったことが各高等学校から報告された。

次に、B高等学校から、書式を改めたフェイスシートの記述例（図2）が示され、再度フェイスシートの提案がなされ協議が行われた。しかしながら、検討会後のアンケートの回答（表2）にあるように、家族構成、生育歴、保護者の見解が記入されることへの強い抵抗感から、多くの中学校からフェイスシートでの連携が難しいとの意見が出され、文書について再検討することが求められた。

6. プロフィールシートの作成（X年10月）

2回の検討会の結果を受けて、フェイスシートに替わる文書の在り方を検討する必要が生じた。ことに中学校からフェイスシートへの記入を拒んだ要因の一つとして、先述した課題に加えて、提案が2月で年度末の多忙な時期に差し掛かったこと、シートの書き方（記述内容）についてこれまで実践例がなく、新たに詳細な書類を作成する時間と労力を割くことが極めて難しい状況であったことなどが挙げられた。

学年 1年	生徒 氏名	作成者	所属 職名	B高等学校 教諭
入学前 の情報	読書が好きで、よく本を読んでいる。何に対してもこだわりが強く、教科によっても得意、不得意が深い。授業では一人で行っていたり、授業中に寝てしまったりすることがある。授業は積極的に、人の嫌がるような授業でも黙々とできる。現状では、難しさが同じ趣味を持ち、気が許せる友人ができれば、周囲とのコミュニケーションが上手取れるようになると思うので、担任としても学校行事などを通じてコミュニケーションのチャンスを広げるよう配慮していきたい。授業では、興味がない場合、集中力の持続が難しいが、教科や説明の仕方により具体的な例をあげると理解が深まる。補習などには真面目に取り組む理解しようとする姿勢はある。教えたときは理解しているようであるが、なかなか定着が難しく、努力がすぐに点数に表れないところがある。しかし、学習に対する姿勢は真面目なので、何度も復習テストを繰り返して、個別指導を行うなどすれば、力は着いてくると思われる。			
担任所見 入学後の 情報	普段は、落ち着きがある様子で生活をしている。一人でいる時間が多く、朝登校後や休みには、図書館へ行ったり、壁には一人で行ったばかりの書きこみをしているときもある。授業は積極的に、人の嫌がるような授業でも黙々とできる。現状では、難しさが同じ趣味を持ち、気が許せる友人ができれば、周囲とのコミュニケーションが上手取れるようになると思うので、担任としても学校行事などを通じてコミュニケーションのチャンスを広げるよう配慮していきたい。授業では、興味がない場合、集中力の持続が難しいが、教科や説明の仕方により具体的な例をあげると理解が深まる。補習などには真面目に取り組む理解しようとする姿勢はある。教えたときは理解しているようであるが、なかなか定着が難しく、努力がすぐに点数に表れないところがある。しかし、学習に対する姿勢は真面目なので、何度も復習テストを繰り返して、個別指導を行うなどすれば、力は着いてくると思われる。			
学習面 での 実態 と 支援	国語	数学	理科	美術
国語	授業中に集中する時間が短い。指示の意味が分からないことや教科用語の理解が浅い。指示が複数あるときは、注意が他へ向いてしまったり、机間指導をしなくても本人の理解度を聞くように心がけている。そうすると指示したことを正確にできるようなようになる。ペア活動でも進んで友達と協力しようとはしていないが、現段階ではまず、相手と正対しコミュニケーションを取ろうとする態度を作ることから始める段階である。リーディングの事も徐々に大きくさせていく。			
数学	授業中、注意を要するようなことはないけれども、本人はおそらく頭の中で全く授業とは違った世界の中に入っているような気がする。補習などの指導にも真面目に従うけれども、なかなか点数が取れない。しかし、真面目に課題にも取り組む姿勢があり、その場での理解ができる。それが長期に定着できるように授業の復習プリントを作成するなど工夫をする。その部分に関しては問題が理解できるようになってきた。自分から尋ねる声かけなどを意識して、机間指導の際には声をかけていく。			
理科	化学式などの記憶が苦手。計算が伴うとなかなか取り組めないところがある。しかし、提出物は、わずかな記入漏れがあるが毎回提出できている。授業・実験とも手順を明確にして、用具の使い方や計測の仕方など丁寧に説明するとグループで一線にやっており、特別問題はない。			
美術	本人がいないため孤立している。全体に説明した時に、その一隅についていけないところがある。あとで、個別に説明すればしっかりと理解し、積極的に取り組める。表現力が高く、独創性もある作品を作ることがある。一人でいることが多いが友達に話さない気配になる。自分のペースを強く持っており、たまにその世界から抜け出せないことがあるように見える。校内検定では勝手に自己解釈し違う範囲をして、あとで聞きに来るなど。			
進路希望	就職を希望している。専門技術を身につけたい。			
支援・指導 方針について	作業などの見通しが立つものについては、しっかり取り組んでいるようであるが、言葉だけの情報に対しては、苦手が目立つところがある。指示する際には、言葉だけでなく、視覚的な情報も併せて行うようにし、より具体的な指示にするとう理解しやすいように思われる。自分の世界を持って一人でいることが多いので、周囲の彼の特性を理解しつきあえるようなクラスメイトができるよう取り組む。			

※記述内容は架空のものである

図3 プロフィールシートの記入例

このことを受けて、B高等学校において、フェイスシートを簡素化した「プロフィールシート」を第1学年から第2学年への学年移行に向けての文書として作成し(図3)、その中に中学校から口頭で得た情報についても記入するようにし、移行連携という共通部分から、まずは高等学校の中での学年間の移行連携の取組を先行させ、それを中高連携の文書モデルとして協議の場に提案することとした。

プロフィールシートには、①中学校からの情報、②高等学校入学後の担任の所見、③各教科の授業での学習面・授業態度・対人関係などを含めた情報等を客観的にまとめ、なるべく生徒像が分かるようにし、これを次の学年に向けて作成して、担任や教科担任が替わっても生徒の特性を理解し、生徒が安心して学校生活を送ることができるためのツールとすることを目指した。また、プロフィールシート作成にあたっては、その前段階として、教科担当者に「生徒情報提供シート」(図4)を作成し、日常の授業での気になる様子につ

(秘) 生徒情報収集カード

下記の質問事項について御記入下さい。

記入日時 平成 月 日

対象生徒氏名 年 科 氏名 ()
教科名 () 担当 ()

1 授業中で生徒との関わりの中で、気になることはありませんか。(生活・対人関係など) また、気になった点についてどうすれば解決できるのか取り組んだ手立てがあれば、その効果・反省も含めて記述して下さい。

例(気になること) 落ち着きがなく、指示をしてもすぐ行動することが出来ない。(手立 て) 指示をなるべく簡潔な言葉で、できれば板書するようにした。場所や時間については、より具体的な表し方をすれば比較的スムーズに次の行動に移ることができる。

授業中、注意を要するようなことはないけれども、本人はおそらく頭の中で全く授業とは違った世界の中に入っているような気がする。補習などの指導にも真面目に従うけれども、なかなか点数が取れない。しかし、真面目に課題にも取り組む姿勢があり、その場での理解ができる。それが長期に定着できるように授業の復習プリントを作成するなど工夫をする。その部分に関しては問題が理解できるようになってきた。自分から尋ねる声かけなどを意識して、机間指導の際には声をかけていく。

2 学習面で、気になることはありませんか。また、気になった点についてどうすれば解決できるのか取り組んだ手立てとその効果・反省も含めて記述して下さい。

例(気になること) 集中力の持続が難しく、興味がないことに関しては別のことを考えたり、したりする。板書を写す速度が速く授業について行くことができないようだ。(手立 て) 集中できるように教室の環境を整え、黒板には連絡事項などを書かないようにした。席を前の方に移し、黒板以外の物があまり視界に入らないようにすると授業に集中できるようだ。板書については、ワークシートを工夫し、写す量を減らすようにすると時間内に板書内容も写すことができるようになった。

本人がいないため孤立している。全体に説明した時に、その一隅についていけないところがある。あとで、個別に説明すればしっかりと理解し、積極的に取り組める。表現力が高く、独創性もある作品を作ることがある。一人でいることが多いが友達に話さない気配になる。自分のペースを強く持っており、たまにその世界から抜け出せないことがあるように見える。校内検定では勝手に自己解釈し違う範囲をして、あとで聞きに来るなど。

図4 生徒情報提供カード

いて記述を求めた。

その結果、プロフィールシートの作成によって、特別支援教育コーディネーターや担任という限定された者が情報を得るだけでなく、教科担当者・実習担当者等もプロフィールシートを活用することで、生徒のこれまでの状況や特性を適切に理解し、授業改善に繋げていく姿勢が見られるようになった。

IV 考 察

1. 中学校側からの文書による情報提供の困難さ

本研究における中学校側と高等学校側との文書による情報交換は、残念ながら1事例も得ることができなかった。2回の検討会で文書による情報提供の問題点として中学校側から出された意見は、以下の2点に大きく整理できる。

①文書による連携の手段として、フェイスシートを提案したが、フェイスシートに関しては、保護者の理解を得ることが困難である。特に、グレーゾーンの生徒は、高等学校入学後に心

配な面も多いと感じているが、専門機関による診断や検査を受けない状態で、保護者の理解を得ながら、高等学校に本人についての「不利な情報」を伝えることはできない。

- ②文書及び口頭で伝えた情報を高等学校がどのように利用し、管理できるのかが不安である。生徒の個人情報である内容について、高等学校でどのように取扱われるのかが分からない。

これらの点は、澤田（前出）による結果と同様のものであり、中学校側からの文書による情報提供の困難さが示唆された。また、2回のアンケート記述内容からは、今回実践した高等学校側が向いての口頭での情報交換を推進する意見が多数見られた。口頭での情報交換は、中学校担当者と高等学校担当者が顔を合わせて会話をすることで、詳細な内容についても聴取することが可能となるが、メモのとり方や聴取したものをどの程度理解しているかという聞き手の力量によって、得られた情報の伝わり方に大きく差が生じる可能性を十分に孕んでいる。一方、文書による情報提供は、文章や箇条書きにすることによる情報の抜け落ちの可能性を十分に孕んでいるが、一定の基準で記録された内容を読み返すことができるとともに、その記述を補完する形で口頭での質問や聴取を追加することで、一層の内容理解を促進させることもできる。また、中学校側から、保護者所見を省き内容を簡素化したシートの記述には同調する意見も見られたことから、今後は文書を工夫し口頭での聴取も合わせた「文書と口頭の双方による連携」を模索することが求められる。

2. プロフィールシートの取組の成果

フェイスシートの課題を受けて、B 高等学校ではプロフィールシートの作成に取組んだ。これは、中学校へ書面による情報提供を依頼する前に自ら、高等学校で実際に連携のためシートの作成を行ってみて、その体験から作成上の留意点や課題を知れば、中学校へ依頼する際にもその経験が生かされる書面の内容や作り方が分かるのではないかという理由からであった。しかし、検討会のアンケートにもあったように中学校からは「簡潔なシートで」という要望もあり、これから定着を目指すためには、シートの書式は簡潔で自由であることが示唆された。そこで、シートの様式よりも

「シートの内容はいかにあるべきか」を実践の中で考えることにした。

本研究での学年間移行で重要視したことは、担任だけの情報ではなく、学校生活全般において、学習面・生活面の生徒の困り感を明らかにし、その解決への手立てとその成果・反省とを次の学年に引継ぐということであった。具体的には、教科担任からの情報、中学校からの情報、高等学校入学後の担任からの情報、そして、それらを基にした専門家の意見が入れられたシートを作成し、その情報の高等学校生活3年間の蓄積を卒業後の進路支援に活用することを目指し作成することにした。また、支援対象生徒の把握については、X年3月の中学校訪問での情報提供を受けた1年生13名に加えて、その他の気になる生徒についても教科担任に「生徒情報収集カード」の記入を求め、それを集約することとした。

その結果、どのような特性が見られるか、また、困っている点はどこかという実態を中心に情報を集めることが可能となり、それをもとに支援計画を立てることが可能となった。また、X年10月には、このプロフィールシートの見直しを行い、入学後半年過ぎた状態で支援対象生徒がどのように変わったか、また、指導の中で教科担任が考えた手立てを通して、その生徒がどのような反応を示し、その結果、それぞれの課題についてどう取り組んでいるかについて情報を集約しまとめることで、個別の指導計画書と同様のシートを作成することができた。これらの結果は、学年間移行連携に向けて、教師全員が参画した高等学校での支援としては意義あるものとなったが、本研究で中学校との連携に反映することはできなかった。しかしながら、このシートを中学校との連携に用いた際に、今回の取組での記述量は膨大であると思われ、記入する書式・項目（欄）が多くなると、書くのが面倒になり、細やかな記述が長続きしなくなるであろう。このことから、記述しやすい質量の文書フォームが求められる。

3 「A-CAPDo サイクル」の体現

特別支援教育においては、「計画し（Plan）、実践を行い（Do）、評価をして（Check）さらなる実践をする（Action）」の「PDCA サイクル」を円滑に機能させることが求められている（柘植ら、

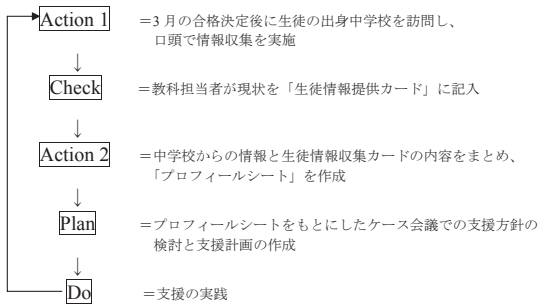


図5 B 高等学校における A-CAPDo サイクル

2005)。

これに対して、熊本県立松橋養護学校 (2010) は、2009年度より、現状を理解し (Check)、改善に向けた働きかけを行い (Action)、それをもとに計画を立案し (Plan)、さらなる実践を行う (Do) という「CAPDo (キャップドゥ) システム」を提唱し支援を行っている。このシステムは、実態の把握をしないままに計画立案をすることは、当事者の立場ではなく支援者の立場での考えを当事者に強制してしまう可能性があることを示唆しており、非常に意義深いものである。しかしながら、河田 (印刷中) は、一小規模私立大学における発達障がい学生支援の実践を整理した中で、PDCA サイクル及びCAPDo システムの問題点として、「現状の理解 (Check)」の段階は、「それ以前の何らかの支援実践 (Action)」があり、その支援実践を踏まえてはじめて「CAPDo」が成立することに言及し、支援体制整備の初期段階における「A-CAPDo サイクル」の有用性を指摘している。

そこで、B 高等学校における連携から支援までの取組の流れを考えると、①3月の合格決定後に「生徒の出身中学校を訪問し、口頭で情報収集を実施 (Action 1)」し、②「生徒の現状のチェック (Check)」として、教科担当が当該生徒の現状を「生徒情報提供カード」に記入し、③中学校からの情報と生徒情報収集カードの内容をまとめ、「プロフィールシートを作成 (Action 2)」し、④プロフィールシートをもとにした「ケース会議での支援方針の検討と支援計画の作成 (Plan)」を行い、⑤授業等での「支援の実践 (Do)」という「A-CAPDo サイクル」による支援が体現されて

いると言える (図5)。

このサイクルは、入学前の中高連携の初期段階においても、まずは高等学校側が中学校に向向いて情報を得てみることで、支援前の状態像を理解することができ、特別支援教育コーディネーターや担当が支援を行うのではなく、教科担当者を含めた教師一人一人が当該生徒の授業等での様子などの情報収集に取組み、1つのシートにそれらをまとめることで、計画性のある支援が実践されるという一連の展開が期待できる有効な方法と考えられる。

V. まとめと今後の課題

本取組では、A 地区の高等学校の実態として、生徒の学力差が大きいことでの授業展開の困難さが浮き彫りとなり、加えて、対人関係や家庭環境の問題を有する生徒の増加に伴い、適切に進級・卒業まで導くにあたっては、当該生徒に関するこれまでの生育歴・教育歴に沿って情報を収集することが肝要となった。また、生徒への適切な支援が不十分であることによる成績不振や欠課時数の増加に伴い「原級留置や退学」となってしまうことは、特別支援教育の理念に反することであり、これらを避ける意味でも、高等学校入学時から学習面・生活面等における実態把握をする必要があり、とりわけ前段階の「中学校との連携」は不可欠となった。これらに加え、これまで A 地区では特別支援教育に関する中高連携はほとんど行われていなかった。

そこで、A 地区の実態を踏まえて、B 高等学校が核となり、高等学校の「横のつながり」として、「研究会」を立ち上げ、そこに管内の中学校を巻き込んでの中高連携に関する研修会を開催した。このことが契機となり、中学校と高等学校が連携にあたっての情報提供について具体的に協議をする「検討会」を複数回開催した。協議では、情報提供への保護者の了解の困難さ及び個人情報保護の観点から「書面での情報提供」が大きな障壁となった。しかしながら、「高等学校担当者が中学校に向向き」「口頭での情報収集」をしたことで、結果として、中学校からの積極的かつ具体的な情報提供がなされるに至った。このことから、生徒のために受け入れた側が送り出した側に向向いて

いくことで、送り出した側も誠意をもって応える関係が芽生えたことは、今後の円滑な中高連携を進展するための大きな礎となったと言えよう。

一方で、本研究における取組は、高等学校の教師が、生徒の特性やそれによる学習面・生活面等の困り感を正しく知ることは、支援以前の「3生徒が安心して学校生活を送ることができる」ために重要なことであると気づいたことによるものでもあった。生徒の困り感を理解すれば、学習面であれば、どうやって教えれば理解できるのか、個別指導がなければ理解ができないのかなど、教える工夫や教材研究などをするようになる。また、これまでの結果だけで生徒を判断するのではなく、生徒が分かることができず理由を探求することで授業改善のヒントが与えられ、それが他の生徒にも分かりやすい授業につながるという結果も生み出すことができる。生活面の指導においても、一度の指示を短く、具体的にすることで、他の生徒に対しても、分かりやすい指示となる。さらには、対人関係が苦手など生活面に課題を抱える生徒の学校生活での苦手な場面を予想することで、生徒が安心して集団生活を送る環境を作ることができる。この教師の気づきが中学校への情報収集のモチベーションを高める契機となったことから、教師が単独でなく「集団で生徒の困り感を探求する体制づくり」も重要と思われる。

また、研究の成果とともに、さらなる課題も明らかになった。

本研究では、高等学校担当者が中学校に出向いての「口頭による聴取」によって中学校側のレスポンスがあり、収集した情報を踏まえたプロフィールシートの作成が可能となった。しかしながら、その過程では「書面のやりとり」は行われなかった。これについては、個人情報提供における「保護者の同意」という障壁が付きまとうことは言うまでもないが、支援されるべき中心は「当該生徒」であって、中学校でのよりよい支援実践の内容と成果が「記録」として伝わらないことによって、これまでの支援の継続がなされずに高等学校の3年間を過ごしてしまえば、当該生徒の人生3年間の適切な発達保障はなされないことになる。そうならないためには、検討会を重ねる中で、中学校側の動きも高等学校の支援スタンスに寄り

添うように創意工夫される必要があろう。

また、本研究での口頭による情報収集では、当該生徒の「問題点」に関連する内容の収集に重きがおかれてしまった。ストレングスの視点に立てば、当該生徒の「良い点（長所）」についても的確に情報を収集し、その良さを認めながら支援に生かすことも重要である。この「長所の情報収集」は、保護者と対話をする際に、当該生徒の良い面から話題を切り出す契機となり、保護者との良好な関係を生みだし、ひいては情報提供への同意を得ることに繋がりていくであろう。

さらに、本研究で作成されたプロフィールシートには、具体的かつ詳細な記述がなされたものの、その記述の読みづらさによって、内容の理解が阻害されてしまうことが懸念される。項目が整理されていない具体的な自由記述は読みづらく、最終的には読まなくなる可能性が高い。一方で、項目がきちんと整理されていても、箇条書きや抽象的記述は、記述内容の意味・意図が判らずに読まなくなるであろう。一方で、記述の内容は生徒の実態についてのマイナス面を強調する記述が目立った。また、このシートの簡素化が中学校側に記述してもらう可能性を高めることから、可能な限り記入する項目をシンプルに精選した上で、当該生徒の長所も含めた肯定的かつ具体的な記述が求められよう。

今後は、これらの充実を図りつつ、A地区での中高連携をより強固にしていきたい。

文 献

- 文部科学省（2007）：平成19年度「高等学校における発達障がい支援モデル事業」実施要項。
- 文部科学省（2008a）：平成20年度「高等学校における発達障がい支援モデル事業」実施要項。
- 文部科学省（2008b）：平成20年度「発達障がい等支援・特別支援教育総合推進事業」実施要項。
- 文部科学省（2009a）：平成21年度「高等学校における発達障がい支援モデル事業」実施要項。
- 文部科学省（2009b）：平成21年度「特別支援教育総合推進事業」実施要項。
- 文部科学省（2010）：平成22年度「特別支援教育総合推進事業」実施要項。
- 河田将一（2011）：小規模私立大学における発達障がい学生への支援の現状と課題—九州ルーテル学院大学における A-CAPDo サイクルによる支援。

精神療法, 37 (2), 印刷中.

澤田旬美 (2009) : 中学校・高等学校の連携を通じた特別な教育的支援を必要とする生徒の進学に向けた支援の在り方. 福島県養護教育センター研究紀要, 23, 42-45.

杉田郁代 (2009) : 通信制高校における学校教育相談の研究 (1). 環太平洋大学研究紀要, 2, 103-

108.

柘植雅義編 (2005) : 教職研修9月号増刊学校のPDCA シリーズ「通常学級での特別支援教育PDCA」. 教育開発研究所.

(2011. 2. 28 受稿, 2011. 3. 25 受理)

A trial of cooperation by special needs education among the junior high schools and the high schools in the A area of Kumamoto prefecture (1)

— Regarding the first step of cooperation —

Shoichi KAWATA & Kazuhiro SARUWATARI

In the A area in Kumamoto prefecture, there have hardly been any cooperation among the junior high schools and the high schools with regard to special needs education, and the high schools teachers have been hoping to get results of special needs education from the junior high schools. Therefore, the junior high schools and high schools in the A area had several discussions about the cooperation among themselves. In the discussion, the high schools teachers recommended that the junior high school teachers complete "face sheets", however, none of them were filled out because of student's privacy protections and because it was expected to be difficult to get an understanding of parents. Therefore, some responsible teachers of the high schools visited the junior high schools, collected results of special needs education orally and made "profile sheets" in which the results and the actual situation of the high schools were summarized. As a result, the high schools teachers responsible for particular subjects understood the students' conditions so far and their characteristics, which led to the improvement of the classes. On the other hand, there remain issues of how to use written forms to provide getting results of special needs education from the junior high schools to the high schools smoothly.

Key words: cooperation among the junior high schools and the high schools, first-step, A-CAPDo cycle